

い。そして悩んでここ数年間があつというまに過ぎ
てしまった。

今日は、酒をのんで酔っていることもないし、危
険なものも持っていない。またいちは成人して
いるので、人間に迷惑さえかけなければ、保護者が
いなくても都電に乗れる。そこで、飛鳥山公園を出
て、東京で一本だけになってしまった都電荒川線に
むけて、ぶらぶらと歩き始めた。日はまだ高くさん

私と子どもたち

杉野 恵

さんと照っている。王子駅について、ここちよい緊
張とおごそかな気持ちで乗車した。乗りながら、今
年の父の七回忌のときは子供達であつまり、散歩で
もしながら、都電に乗ろうと思った。考えているう
ちに二駅が過ぎて、家の近くの駅でおりました。私に
とって、都電は時間をのせて毎日ほしり続けてい
る。次は自分の子供を連れて一緒に都電に乗ろう。

(電気メーカー勤務)



小学校では、子どもはいつも走っているようです。チャイムが鳴って「終わりましょう。」と言った瞬間に前をおさえてトイレに走りこむ子。(これは、低学年だけかもしれませんが) 体育館に早く行きたくて、着替えながら走っていく子。休み時間が終わって息をきらしながら走って教室に戻ってくる子。もちろん『体育』という教科がありますので、短距離走・長距離走などでも走らなくてはいけませんし、運動会には『かけっこ』もあります。

子どもたちは、走っていい場面と、走ってはいけない場面があることを知っています。学校では時間も場所も、大部分は子どもたちが走ってはいけないことになっているようです。でも走ってしまう子どもたち。特に廊下は、毎日陸上大会のようです。学校では、生活目標によく『廊下は、静かに歩きましょう』というようなものがあります。平日頃から、私たち教員は、子どもたちに注意しているのです。なにも廊下を走らなくても、校庭だつて屋上

だつてあるでしょうに、と思うのですが、子どもたちは、様々な理由で走っているようです。とにかく、いくら口をすっぱくして「走るな。」と言っても、委員会の子が、ポスターを作って貼つても、廊下や教室を走る子どもは、あとをたたず、頭を悩ませる毎日でした。

昨年四月に入学してきた我が一年二組の子どもたちも例外ではなく、教室ではおいかけて、廊下ではかけっこという状態でした。

「お友だちとぶつかつたらどうなるかな?。」

「けがするー。」「ころぶー。」「いたいー。」

「だから、校舎の中は、走つたらいけないのよね。」「はい。」

わかつたのかと思っていると、ほんの五分で元通り。やっぱりかけっこです。そんな子どもたちが二学期の半ばから変わってきました。三学期の今は、廊下でも教室でも走ることはほとんどなくなりました。うっかり走っている子にはまわりの子どもが必

ず注意してくれます。それは、私が鬼のように怒るからではなく、罰を与えるからでもなく、私のおなかにいる赤ちゃんのおかげなのです。子どもたちには「先生のおなかには、赤ちゃんがいるの。この赤ちゃんは、まだとっても小さくて弱いからみんなが走ってきてぶつかつたりすると死んでしまうかもしれないよ。」という話をしたのです。子どもたちは、とても興味深げに私のおなかを不思議そうに見ながら聞いていました。

次の休み時間から、変化がおこりました。子どもたちは、走らなくなりました。「だめだよ。先生にぶつかつたら赤ちゃん死んじゃうんだよ。」などと、注意しあっています。次の日には、「もう生まれたの？」とまじめな顔で聞きにくる子がいたり、「うちのおばちゃんも、赤ちゃんが生まれてくるんだよ。」と、子どもたちは、それぞれの思いで、私と私の赤ちゃんに話しかけていました。廊下で会う他学年の子どもたちも、「おなかに赤ちゃんいるん

でしょ。」と聞く子が増え、なんとなく気を遣って歩いてくれています。

今まで、毎度言っても、怒鳴っても『走らない』という約束は守ることができなかったのに、まだ生まれてこない、目に見えない、おなかの中の赤ちゃんという存在を子どもたちはこんなに意識して、約束なんてしなくても、走ることをやめたのです。子どもたちの気持ちがいれしく、また不思議でした。『誕生』ということが子どもたちに与える影響は、とても大きいものでした。一年生の子どもの中には、どんな気持ちで芽生えたのか、すべてはわかりませんが、何かを感じ、大切にしようと思ってくれたことは、行動に表れました。

走ることは、子どもにとっては無意識で動くことのようにです。走っているつもりはないことが多いのです。でも、何かのきっかけで自分の行動を見直すことは、いい経験になるでしょう。また、いくら言っても、心でわからなければ子どもを変えること

はできないのだということを私は感じました。走るということから、私と子どもたちと私の赤ちゃんの

近況を書いてみました。

(江東区立明治小学校)

走る玩具

くクルマの魅力く

村松 明子

クルマのおもちゃは、いつの時代も男の子に支持される玩具のジャンルの一つです。クルマとひとくちに言っても、電車、自動車、バイクなどさまざまですし、年齢によって魅力を感じる特性も色々ですよです。

〇二歳ほどの小さな男の子は、クルマの玩具

——車輪のついたオモチャ——を目の前になると、たいいていその背を手の平で押して「ブーブー」と言いながら動かそうとします。「ころがし走行」というのですが、この年齢用の、いわゆるベビーあるいはブリスクルトイと区別される玩具のクルマは、色あいも車輪のしくみもシンプルです。ゼンマイや